

みえちゃうなんて、ヒミツです。②

りん かん がっ こう かく おも
～林間学校と隠した思い～

か げ ろ う つ づ ら
陽炎氷柱・作

ゆ き ま る
雪丸ぬん・絵



アルファポリスきずな文庫

- 1 おもい朝 6
 - 2 楽しい？ 林間学校 20
 - 3 波乱の学年集会 34
 - 4 颯馬さんと桜二くんからのお誘い 52
 - 5 いざ、林間学校へ！ 76
 - 6 謎だらけのスタンプラリー 141
 - 7 犯人を特定せよ！ 161
 - 8 景品を取り返せ！ 185
 - 9 桜二くんの誘い 206
 - 10 フォークダンスは…… 225
- あとがき 234

の がみ りく 野上 陸

えいらんがくえん ちゅうがく ねんせい ゆきの おな
英蘭学園の中学1年生。雪乃と同
じ林間学校の班のメンバー。内部
生で秋兎とも親しい。



その に 園田たまき

えいらんがくえん ちゅうがく ねんせい ゆきの おな
英蘭学園の中学1年生。雪乃と同
じ林間学校の班のメンバー。関西
弁の控えめ女子。



みな 水瀬 唯

えいらんがくえん ちゅうがく ねんせい ゆきの おな
英蘭学園の中学1年生。雪乃と
同じ林間学校の班のメンバー。
ダンスが得意な理系ギャル。



あやのこうじ か 綾小路花凛

えいらんがくえん ちゅうがく ねんせい ゆきの おな
英蘭学園の中学1年生で、雪乃の
クラスメイト。林間学校で雪乃と同
じ部屋になったが……？

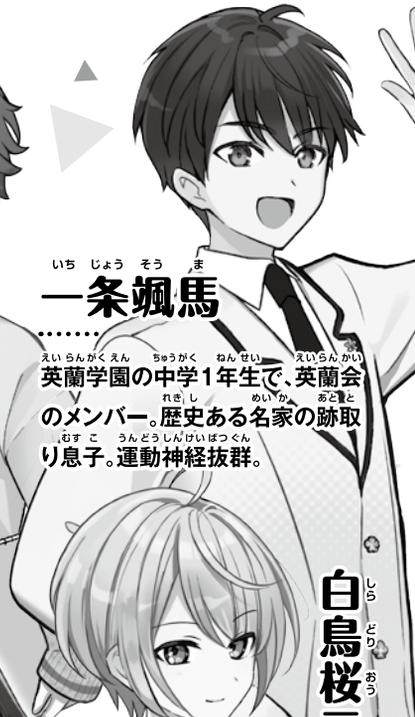
み 三葉 秋兎

えいらんがくえん ちゅうがく ねんせい ゆきの おな
英蘭学園の中学1年生
で、雪乃の幼馴染。待生
として英蘭学園の初等部
に転入するほどとびぬ
けた芸術の才能を持つ。



いち じょう そう ま 一条 颯馬

えいらんがくえん ちゅうがく ねんせい ゆきの おな
英蘭学園の中学1年生で、英蘭会
のメンバー。歴史ある名家の跡取
り息子。運動神経抜群。



しら どり 白鳥 桜二

えいらんがくえん ちゅうがく ねんせい ゆきの おな
英蘭学園の中学1年生で、英蘭
会のメンバー。有名IT企業の
社長子息で、颯馬とは幼馴染。
冷静沈着な性格。



なな 七瀬 雪乃

めいもん えいらんがくえん ちゅうがく ねんせい つく
名門・英蘭学園の中学1年生。付
喪神を見たり、その声を聞いたり
することができる力を持っている。

人物紹介
Character

1 おもい朝

「どうして七瀬さんが、一條様と一緒にいるのかしら」
眉をキツ！ と吊り上げてこちらを睨む綾小路さんの姿に、私は思わず身を固くしてしまう。
ちやうど登校時間だから、校門の近くにいる生徒は多い。みんな一斉に私の方を向いて、少
しだけ颯馬くんたちのお誘いに乗って、一緒に登校したことを後悔しそうになった。
（颯馬くんたちは『事件』の報告ついでに私を送ってくれただけなんだけど——付喪神のこと
もあるし、本当のことは話せないよ……!）

私——七瀬雪乃は生まれつき、付喪神という存在が視える。
付喪神というのは百年大切に使われ続けた物に宿る、幽霊のようで妖精のような不思議な存
在なんだけど……ほとんどの人は彼らのことが見えないんだ。

小学校のときはそれが原因でいじめられたこともあって、普段はおばあちゃんから貰った眼
鏡でこの力を隠しているの。それでゼロから人間関係をやり直すために、自宅から遠く離れた
ところにある超名門私立の英蘭学園中等部を受験したんだよね。

でも、中学では目立たず普通に過ごそうって決めてたのに、制服採寸の日、付喪神を助ける
ためについて力を使っちゃったんだ。

結局、その場に居合わせた同級生の一條颯馬くんと白鳥桜二くんには力のことがバレちゃっ
たんだけど——二人とも気味悪がることなく信じてくれたの。そんな二人の力になりたくて、
私は小さい頃からなにかと助けてくれた幼馴染の三葉秋兎……アキくんと一緒に彼らの『失せ
物』探しを手伝うことになったんだ。

付喪神たちの協力もあって、いろんなトラブルに遭いながらも私たちは颯馬くんの『失せ
物』を見つけることができた。

ちよつと危ないこともあったけど、全員の力が噛みあって、まるでドラマのような一日。
それが一度きりで終わるのもつたいたいなくて、颯馬くんの提案もあって私たち四人はそのま
ま『付喪神鑑定団』として秘密の活動を始めることになったんだ。

（自分の力と向き合ういいチャンスだし、みんなと一緒に事件に立ち向かったのはすごく楽し
かったもの）

だけど、問題が一つだけあった。

それは……颯馬くんと桜二くんが、学校で芸能人顔負けの人気者だったところ！特に女子は学年関係なく颯馬くんたちに夢中で、お互いに抜け駆けしないうちにバチバチ睨みあっているくらい。

（入学式の日、颯馬くんによつと話しかけられただけなのに、あつという間に綾小路さんのグループに囲まれたもんね……あはは）

内部生でもある綾小路さんは、一年生の中で女子のリーダー的な存在だ。しかも綾小路さんは颯馬くんのことが好きなようで、他の女子が颯馬くんに話しかけるだけでも不機嫌になる。

そんな彼女に『鑑定団』のことを知られてしまったら、どんなことをされるか……

「お、おはようございます、綾小路さん……」

ひとまずあいさつを返したけど、綾小路さんの表情は冷たいまま。

付喪神鑑定士としてやっていくつて前向きに覚悟を決めたばかりだけど、私は顔がひきつるのを止められない。

そんなぎこちない様子の私を、綾小路さんは鼻で笑った。

「ええ、とつてもいい朝ね。まさか七瀬さんが一条様と一緒に通学しているなんて思わなくて

よ」

感情を抑え込んだ、寒気すら感じるような冷たい声。

わずかに傾げられた頭の動きに合わせて、栗色の髪がさらりと流れる様すら威圧されているように感じる。

登校中だからか、珍しく彼女の周りに取り巻きの姿はない。けどその鋭い声が周りの注意を引き、他の生徒も何事かとばかりに足を止めてこちらを見ていた。

「え、一条様と一緒に登校つて、なにそれ」

「やだ、桜二さまもいるじゃない。どういうこと？」

「隣に居るのつて、特待生の三葉くんだよな？　なんであんな平凡な子が三人と……」

ひそひそとした声が耳に届く。
憧れの的である颯馬くんたちは休み時間ももちろん、ちよつとした移動教室ですら人ばかりができるほど人気がある。

そんな中で一緒に登校したつて知られれば当然注目を浴びるわけで、針の雨が全身に降り注いだような気分だ。

（事実だけ……みんなと釣り合つてないつて突き付けられているみたいでしんどいなあ）



「……それはそうと、言い方に気を付けないと今後友達が……特に女友達は一切できなくなる可能性があるので、ある程度は避けたいところ。」

私は言葉を選びながら、後ろめたいことなんてないよつていうふう顔に顔を上げた。

「颯馬くんたちとは友達なんです。今日はたまたま会って、それで一緒に学校に来たの」

結局、あまり人と関わったことがない私から言えたのはそれくらいだった。

うん、一歩成長だと思おう。

「そうそう、ちよつとオハナシがあつてねえ」

桜二くんも軽くフオローを入れてくれたが、綾小路さんの怒りはむしろ強くなった。

「……友達？ あなたが一条様と？」

猫のように吊り上がった目が私と颯馬くんたちの間を行き来する。

そんな視線から私をかばうように、桜二くんは口を開いた。

「オレとアキもね」

「白鳥は話をややこしくしないで」

アキくんと桜二くんの気さくなやり取りに、綾小路さんの唇がいびつに歪む。

「みなさんはお優しいから、きつと七瀬さんは勘違いをなさっているのね。一度冷静に考え直した方がよろしくてよ」

私は颯馬くんたちの友達にふさわしくない、一緒にいるべきではない。

警告めいた言葉に俯きそうになっていると、ふと安心させるように肩に手を置かれた。

「雪乃は俺の大事な友人だ。そんなことを言わないでくれ」

ハッキリと言いつつた颯馬くんに、遠目で様子を見ながらうかがっていた生徒たちが驚いたような素振り

を見せる。颯馬くんは気さくで誰にも優しいけど、一家という古くからある名家の嫡男という立場から、親しい友人を多く作るタイプではない……らしい。

もちろん綾小路さんもそれを知っているから他の生徒と同じく、わずかに顔をひきつらせた。シヨックを受けたように固まるも、綾小路さんはすぐに我に返って言い募った。

「な、名前……っ、ですが、わたくしは一条様を思っ……！」

そんな彼女の言葉に、颯馬くんがふっと雰囲気や柔らかくする。

「どっちかという、迷惑をかけているのはむしろ俺の方だよ。雪乃には助けられてばかりで、この間も——」

「はいストツプッ！ わざわざ他人に聞かせるような話でもないでしょ」

颯馬くんが勢いのままに全部話してしまう前に、アキくんがさえぎってくれた。

そのいつも穏やかそうに垂れている目は鋭く綾小路さんを捉えており、心なしか他人という言葉や強調している気がする。

（私のために怒ってくれた……？）

アキくんの優しさにほっと息をつけば、冷静になった颯馬くんも気まずそうな表情で綾小路さんに向き直った。

「まあ、とにかく……俺たちはちゃんと対等な友人だから、綾小路さんも変に心配しなくて大丈夫だぞ」

「っ、ええ、親しいのは本当みたいですわね」

これ以上食い下がっても意味がないかと思っただのか、綾小路さんは暗い表情で俯いた。通学カバンの持ち手がぎゅつと歪んでいて、それだけ綾小路さんが強く握りしめているのだと分かる。

もう話が終わったのを察して、周りで野次馬をしていた生徒たちもどんだん散っていく。

チラチラと興味深そうにこちらを振りかえる生徒はいるものの、少しづついつも通りの朝に戻ってきた。

綾小路さんが黙り込んだのをいいことに、アキくんは口を滑らせないとばかりに颯馬くんの背中を押して、さっさと校舎の方に向かう。

私も統こうとしたが、綾小路さんとすれ違いざまにすごく怖い顔で睨まれてしまった。

「いい気になっているのも今のうちよ」

小さいけど、頭から冷や水をかぶせられたような声。思わず足を止めて振り返ろうとしたところで、桜二くんが綾小路さんの視線を遮るように体を割り込んできた。

「オレたちが誰と仲良くなるうと、君が気にすることじゃないよ」

桜二くんは少しも笑っていない目で、口角だけを上げて綾小路さんにそう言い放つ。
 綾小路さんは一瞬怯えたように目を泳がせたが、すぐに早足で私たちを追い越して校舎の方に走り去っていく。

……口を挟む間もなく立て続けに起こったせいで、私はポカんと口を開けて立っているしかできなかった。

たまに見かける桜二くんの毒、やつぱり普段のイメージとぜんぜん違って慣れない。
 そんな私をよそに、桜二くんは踊るようにくるりと振り返る。

「さ、オレたちも教室に行こ」

有無を言わせない圧がある笑みに、私はただ頷いた。



颯馬くんや桜二くんとはA組で別れ、私とアキくんは並んでC組に向かった。

「朝から災難だったね」

「あはは……私も、まさか校門の前であんなことになるとは思わなかったよ」

そう言えば、アキくんも困ったように眉を下げた。

綾小路さんとは同じクラスだから、正直この後の方が気まずい。

(最後に生まれちゃったし、しばらく根に持ちそうだよね……なにもないといいなあ)

考えるだけで沈んでいく気持ちのままに教室のドアを開ければ、私は悪い予想が当たってしまつたことを察した。

だって教室に一步足を踏み入れた瞬間、周りの空気がざつ……と変わったのが分かつたもの。
 (もう朝のことが広まつたんだ)

いつものように、内部生の取り巻きたちが綾小路さんを取り囲んでいる。どうやら落ち込んでいる綾小路さんを励ましているようだ。

それ以外の生徒たちは存在感を消すように自分の席に座っており、張り詰めた空気が教室を満たしていた。とても爽やかな朝の時間とは思えない。

綾小路さんと仲良くない外部生の子たちも私の方を見ようとせず、何人かとは目が合つてもすぐにそらされてしまつた。

「ユキちゃん……」

「大丈夫だよ、気にしないで。こういう時はスルーが一番だから」

あまりよくない雰囲気を察したアキくんが心配そうに声をかけてくれたので、小さく笑みを浮かべて安心させる。これくらいのことなら慣れてるし、下手にアキくんを巻き込むわけにはいかない。

それに本当に味方が一人もいなかった小学校のころに比べて、今の私には鑑定団の仲間たちがいる。こんなに心強いことはない。

(変に綾小路さんの顔色をうかがうより、普段通りに振る舞おう)

後ろめたいことなんて一つもないから、堂々としよう。

(綾小路さんたちの言葉を借りれば、平凡な外部生が颯馬くんとお近づきになったのが嫌なんだろうな……きつと私じゃなくても、女子なら誰が仲良くなっても綾小路さんは怒っていただろうし)

学年を問わず、少しでも自分に自信がある女子は綾小路さんなんて無視して颯馬くん近づこうとする。綾小路さんもそのうち私のことなんて忘れて、ぐいぐいアピールする子たちに目をつけるはず。

黙っていればそのうちこの話も落ち着くだろうと考えて、私はまっすぐ自分の席に向かって歩いた。

途中、何人かとすれ違ったけれど、もちろん誰も声をかけてこない。

何か言いたげなアキくんだったが、変に割り込むことはせず、私の考えを尊重して言葉を飲み込んだ。見るからに「納得していません!」という表情だったけど。

(完全に避けられてるけど……こればかりはしかたない)

机にカバンを置いて椅子に座れば、隣の席の女子が全力で顔をそらした。

入学したばかりで仲の良い友達とはいえない関係だったけど、それでも昨日までは普通にあいさつは交わしていた子だ。露骨な反応に、やはり少し落ち込む。

これが綾小路さんの影響力なのだと、今さらながら痛感する。

彼女に嫌われたという事実だけで、私に近づくことをリスクと捉える人がいる。

さすがに朝のことがあったばかりで綾小路さんは何もしてこなかったが、この日は入学してから今までで一番空気が重い朝の時間になった。

「おはよう……って、なんだこの静かさは!」

その異様さは担任の花園先生にも伝わったらしく、教室に入るや否や怪訝そうな顔で見回した。

もちろんそれに応えられる生徒はいなくて、微妙な空気のままホームルームが始まる。

「ま、気を取り直して本題に入ろうか。今日はみんなにいい知らせがあるんだ！」

花園先生は空気を变えるように朗らかに告げると、パラパラと私たちにプリントを配った。そして全員に行き渡ったのを確認してから、教壇に立つてにっかりと笑う。

「みんなも知つての通り、うちは全国屈指の名門校だ。中等部からすでに全国から生徒が集まるわけだが、そうなると知り合いばかり集まる地元の学校に通うやつらと違って、ここにいる生徒は初対面のやつが多い」

先生は一度言葉を区切ると、私たちの顔を見まわした。

「まだ入学してから一週間しか経ってないし、お互いに気まずいのも理解できる。みんな新しい友人との距離を掴みかねているんだらう？」

英蘭学園はエスカレーター式の学校で、私が通う中等部には初等部からの持ち上がり組と受験組——いわゆる内部生と外部生が混ざっている。

初等部は良家のご子息か、才能を認められた特待生しか入学できないが、中等部からは一般家庭の子でも厳しい入学試験に合格すれば入学が認められるのだ。

ただ価値観の違いはどうしても生まれてしまうため、一部の生徒を除いて基本的に内部生と外部生はお互いに距離がある。

花園先生はオブラートに包んでいるが、要するにその溝のことを指しているのだろう。

（まあ、普通の学校じゃ「一條様に相応しくないわ！」なんてセリフは聞けないもんね）

心の中で苦笑いを浮かべつつ、私は配られたプリントに目を落とす。

雅なデザインにまとめられたそれはとても見やすく、もうすぐ行われる行事について説明されていくのだとすぐに分かった。

流し読みしながら、先生の話に耳を傾ける。

「だが、そんなお前たちに朗報だ！ 毎年必ず気まずさを抱えて進級する新一年生のために、学校側はちゃんと対策している。さあ、前を見てくれ」

花園先生は自信満々な様子で胸を張ると、プロジェクトを起動した。

数秒もしないうちに、スクリーンにでかでかとスライドが映し出された。

（『新入生向けオリエンテーション』……？）

入学のパンフレットにも載っていた文字の羅列に、私はハッと行事の内容を思い出す。

同時に、元氣な先生の声が教室に響いた。

「そういうわけで！ お前たちの交友関係を深めるべく、月末に二泊三日の『林間学校』が開催されるぞ！」

2 楽しい？ 林間学校

パンフレットなどでほとんどの生徒が知っていたおかげか、花園先生の大げさな言い方でも林間学校というイベントに驚く人はいなかった。

それでも学校行事は心を弾ませるものらしく、先ほどまで教室を満たしていた重苦しい雰囲気はあつという間に旅行への期待に塗り替えられた。

（まあ、私以外は当事者じゃないもんね……当の綾小路さんもワクワクしているし）
ひとまずみんなの注意が逸れたことにほっとしつつ、私も中学生活で初めて迎える行事に胸を膨らませた。

そんな私たちの反応に気をよくしたのか、花園先生はより顔を輝かせて説明を始める。

「場所は長野で、宿泊するのは学園が提携しているリゾートホテルだ。持ち物なんかは後日配られるしおりに従って準備してくれ」

林間学校って言っているのに、リゾートホテルに泊まるのはうちくらいだろう。

家柄のいい子が多いから、防犯面で妥協できない事情があるらしい。

（颯馬くんが誘拐されたら、それこそ莫大な身代金を請求できそうだよな）

頭に思い浮かぶのは、前回の事件で行った颯馬くんの家。

時代劇でしかみないような立派なお屋敷に、グラウンドよりも広い庭。桜二くんだつてIT企業の社長令息らしいから、こういう宿泊行事なんてすぐ気を遣いそうだ。

（他の同級生も、私が知らないだけですごい子がいっぱいいるんだろうな）

ざわつく声を聞き流しつつ、私はページが切り替わったスライドに視線を向ける。

「——それから、二日目は五人一グループに分かれて行動する。もちろんクラス別だから、他のクラスの生徒と組むのはダメだよ」

先生の茶化すような言い方に、女子グループから「ええー!?」という声がかかる。
考えるまでもなく、A組にいる颯馬くんと桜二くんのせいだろう。

騒がしくなる中、誰かが声を上げた。

「せんせー、同じクラスなら好きにグループ組んで良いってことですか?」

「いや、グループと宿泊部屋はくじ引きで決める。仲がいい友達同士で固まったら意味がないからな」

花園先生がそう言い切った瞬間、空気がピシッと張り詰めた。

ざわめきが止まったかと思えば、次に訪れたのは爆発するような大反発。

「ちよつと、それは酷くないですか!？」

「部屋まで強制する必要があるんですか? 知らない人と一緒になるなんて無理です!」

特に声を上げたのは、綾小路さんを筆頭とした内部生の女子たち。

日頃から一般家庭の子を何かと目の敵にしているから、同じ部屋で寝泊まりするなんてそれこそ耐えられないのだろう。

(プリントの説明だと、基本的に二人部屋になるみたいね)

うちのクラスは男女ともに偶数だから、三人部屋も一人部屋もなさそうだ。

みんな雑魚寝、じゃないのはさすがだが……二人だからこそ気の合わない子と一緒になったら地獄である。内部生と外部生の親交を深める行事だが、これではむしろ溝が深まりそうだけども。ただど私たちの抗議も虚しく、花園先生は意に介さず悠々と続ける。

「毎年保護者からもぜひと声が上がっているくらい、実のある伝統行事だぞ? どうしても嫌なら欠席でも構わないが……こういった大型行事は成績評価にも関わってくる。そこは理解して行動してくれよな」

淡々と、でも逃げ道のない言い方だった。

しぶしぶながらも抗議の声は引いていき、みんな逃れられないくじ引きに意識を向け始める。かくいう私もその一人だ。今朝の騒動もあり、正直誰と相部屋になつても気まずい。でも同じ外部生だつたら、もしかしたら友達になるチャンスかもしれない。

(やつぱりクラスメイトと仲良くなりたいたいよ……)

それに、ずっと憧れだった女子の友達も欲しい。

同じ部屋だつたら話す機会も多くなるし、二人きりなら私でも話しかけるために勇気を出せるかも。グループは……私一人だけはぶられて他の四人で盛り上がっている場面が想像つく。

いや、変わりたいつて決めたばつかりじゃない。少しでも話せるように頑張らないと。

(でもやつぱりアキくんと同じグループになれたらいいなあ……三日間ぼつちで過ごすのを回避したい!)

ちらりとアキくんの方を見れば、向こうも同じことを考えていたようでバチリと視線がぶつかる。幼馴染みに頼りっぱなしで申し訳ないけど、こういう時は本当に心強い。

「さて、くじ引きをするぞ。出席番号順に呼ぶから、一人ずつ前に来てくれ」

そう言いながら、先生は教壇の横にあるデスクから色が違う箱を二つ取り出した。

いつ用意したのかは分からないが、よく見かける上に穴が開いているタイプのくじ箱だ。全

部の面が段ボールで作られており、中が見えないようになってる。

「この二つの箱の中から、くじを一枚ずつ引くんだ。赤い箱はグループ分けで、青い箱は部屋分けになっている。くじには番号が書かれてるから、同じ番号になった同士で組んでもらうぞ」

簡潔な説明を最後に、先生はくじ箱を教卓の上に置いた。

出席番号が一番である綾小路さんは最初にくじを引くことになり、誰もが息をのんで見守った。

いつも自信ありげな彼女でも、さすがにどこか緊張した様子でくじ箱に手を伸ばす。

「……！ わたくしのグループは四ですわね」

最初だから、番号が分かったところで相手が分からないので喜べない。

難しい顔のまま、綾小路さんは続けて部屋分けのくじも引いていく。

「くじを引いたやつは席に戻らず、まずは後ろの方に同じグループで固まってくれ。部屋分け

は後で確認するからな」

くじを引き終わると、綾小路さんは取り巻きに自分の番号を見せながら先生の指示に従って教室の後ろに移動した。

英蘭学園の教室はとても広いから、全員が後ろに集まってもまだゆとりがある。くじが引かれるたびに空いていく座席にドキドキしながら、私はじつと自分の番が来るのを待った。

「次、七瀬だな」

「はいっ！」

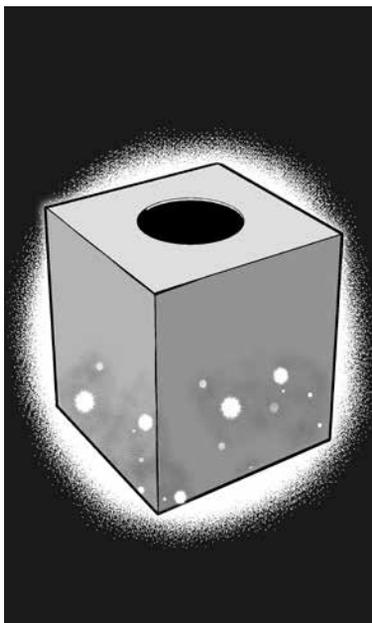
私の出席番号はちょうど真ん中くらいだから、すでに半分くらいの生徒のグループが決まっているということになる。

残念ながら綾小路さんのいる四番はまだメンバーがそろっておらず、私がそこに入ってしまう可能性はまだ残っているのだ。

（お願い、四番以外ならどこでもいいから……！）

必死に祈りながら、私はグループ分けのくじ箱に手を入れた。変に選ぶよりも、直感を信じて最初に触れたくじを掴む。

（これが歴史あるくじ箱だったら、付喪神にお願いして好きなくじを引けたのに！）



ちよつとずるい考えが頭に浮かぶけど、ない物ねだりしても仕方ない。爆発しそうな心臓を抑えて掴んだくじを開けば、赤い紙に書かれた数字が目飛び込んできた。

「三……！」

おそろく宝くじを当てたとしても、これほど喜ばないだろう。みんなの前だから必死にこらえたけど、小躍りしたくなるほど嬉しかった。

（よかったーっ、違うグループだ！ 同じグループの子たちと仲良くなれるかな！）

大きな仕事を終えた気分、今度は部屋分けのくじを引く。無事に綾小路さんと同じグループを回避できた嬉しさで頭が一杯で、正直部屋の番号なんて目に入らなかつた。

私は大変晴れやかな気持ちで二枚のくじを握りしめたまま、教室の後方に視線を移す。

「こっちは三番のグループだよ！」

視線をさまよわせた私に気づいて、先に集まっていたクラスメイトが手を上げて場所を教えてくださいました。

（あ、もう二人が決まっている）

まだ順番を待っているアキくんに向かって、指で三番を引いたよと教えてから、私は同じグループの二人がいるところに向かった。

「同じ番号だったんだね。初めまして、俺は野上陸だ。一応内部生だけど、うちは一般家庭とほぼ変わらないから気楽に接して欲しいな」

最初に声をかけてくれたのは、場所を教えてくださいました泣きぼくろが印象的な男子だ。落ち着いた雰囲気があり、アキくんと席が近くてよく話していたつけ。

そのおかげか、朝の騒動があっても普通に接してくれた。

「あ……う、うちは園田たまぎつていうんよ。お、同じ受験組、よろしくな？」

もう一人は私よりも小柄で、ぱつちりした目が印象的な女の子だ。遠いところから来たのか、



少し訛りがあってかわいい。

元の性格か綾小路さんのせいかは分からないけど、少し怯えているのが気になる。

ここで無理に距離を詰めたら永遠に心を開いてくれなさそうな気配がしたので、私も彼女に做って簡単な自己紹介で済ませた。

同じグループなら一緒に行動する機会も多いだろうし、ゆつくり仲良くなれるといいな。(でも、思ったよりも話しやすそうなメンバーでよかった)

これなら友達になれるかも。

なんて期待していると、ふと肩をポンと叩かれた。

「ユキちゃん、みて！」

聞きなれた声にハツとして振り向けば、大きく三と書かれたくじを手にしたアキくんが目が合う。

「やった、一緒なんだね！」

「うん！ ぼくつてもしかしたら運がいいのかも。ユキちゃんと一緒に回るの、楽しみだなあ」

そう言つてふわつと花が咲いたように笑うアキくんは、女子顔負けの可愛さだった。

先ほどまで私に怯えていた園田さんすら、ポツと顔を赤らめていたほどである。

「秋兔。おまえ、俺たちの存在を忘れてないか？」

「そんなわけないでしょ。トモダチと回れるのもいいよね」

「いや心こもってなさすぎ」

野上千んと気軽にふざけ合うアキくんに、私は思わずまばたきをした。

(颯馬くんたちともこんなふうには話していたけど、アキくんって意外とふざけたりするんだ)

アキくんは小学四年生のころ、芸術の才能が認められて英蘭学園初等部に転校している。それまではずっと一緒にいたから、昔はお互いのことはなんでも知っていた。

出会った頃のアキくんは、柔らかい雰囲気にして意外と友達を作りがらなかった。私以外の人と話していることすら、あんまり見かけなかったくらいだ。

知らないところで成長した幼馴染みの姿に感動していると、園田さんが何かに気付いたように声を上げた。

「あ、最後の人が来たかも」

園田さんの視線の先に目を向ければ、ポニーテールの女子がこちらに駆け寄ってくる場所だった。

「お待たせー。アタシは水瀬唯つていうんだけど、ヨロシクね！」

明るい表情からは私を嫌っている様子もなく、綾小路さんの傍で見たくともないからおそらく外部生なのだろう。残念ながら直接聞けるほどのコミュニケーション能力が私には備わっていないかったけど。

こうして、私たちのグループは五人揃った。

アキくんと野上くんは小等部からの友人で、水瀬さんは明るいタイプの子で私や園田さんも巻き込んで会話してくれている。そのおかげで、クラス全員のくじ引きが終わるまで無言で待つていることもなかった。

入学してから、鑑定団のメンバー以外とこんな風に話したのは初めてのことであったから、なんだかすごく新鮮な気持ち。

(林間学校、すごく楽しくなるかも……！)

心の中でいつか生まれるかもしれないくじ箱の付喪神に感謝していると、そうしないうちに先生がぱんと手を叩いて注意を集めた。

「よし、全員グループが決まったな。同じグループのやつはもう覚えたか？」
先生の言葉に、あっちこつちから返事があがる。

こうして一度集めたのも、顔合わせや自己紹介が主な目的だったのだろう。私たちはまだ入学したばかりで、内部生同士はともかく外部生はまだ顔と名前が一致していないから。

「よし。それじゃあ今度は部屋割りを発表するから、自分の席に戻ってスクリーンに注目してくれ」

くじ箱を片付けて、先生はプロジェクターのリモコンを操作する。

パツと切り替わったスクリーンには、『部屋割り表』と書かれたスライドが映し出された。

どうやら男女で階が分かれており、自分でくじと照らし合わせて部屋を探すスタイルらしい。「今から部屋番号を読み上げるから、自分の部屋番号が呼ばれたら手を上げてくれ」

グループ分けて盛り上がった生徒たちも、そろそろと自分の席に戻っていった。
二日間も同じ部屋ですごす相手が決まるのだ。みんなまた目の色を変えて部屋割り表とらめっこをしている。

私もまだ興奮が冷めないまま、自分の部屋を見つけてから先生の読み上げを静かに待った。
先に女子から読み上げるようで、聞き逃さないように真剣に耳を傾ける。間違いないよう

に、何度も自分のくじに書かれた番号と見比べながら。

「……次、4015室！」

先生の声が教室に響いた瞬間、私は背筋をピンと伸ばして反応した。

(4015……私の部屋番号だ)

もう一度、自分の部屋番号を確認して、私は控えめに手を上げた。

同時に相部屋の子を見つけるべく、サッと周りに視線を走らせる。

「……………え？」

呆然と呟いた言葉は、誰にも聞こえなかったと思う。

でも何度まばたきしても変わらない光景に、私はたまらず息をのむ。

(よりによって、綾小路さんと同じ部屋になるなんて……………っ！)

そう考えたのは私だけではないようで、視線の先で綾小路さんも顔をひきつらせていた。

その目からは嫌な感情がありありと読み取れて、つい怯みそうになる。

気持ちで負けたくないと、勇気を出して綾小路さんよろしくねと笑いかけた……………けど、当

然のごとくにもまれてしまう。

私のへたくそな愛想笑いはひきつった苦笑いへと変わる。

(同じグループになる確率よりは低いつて思ったのに……………一緒の部屋で休めるかなあ)

付喪神に頼ろうなんてずるいことを考えてしまった罰なのだろうか。グループ分けがうまくいった喜びはあつという間にしぼんでいった。

教室のあちこちで友達と同じ部屋になったと笑い合う声が聞こえる。夜ふかしだな、なんて約束している人もいた。

私だけが楽しそうな空気が切り離されたみたいだ。

(……………林間学校、どうなるんだろう)

一か月先の三日間が、果てしなく遠く感じる。

消えない不安を胸に抱えながら、私は険しい顔をした綾小路さんから目を逸らして再び前を向いた。

3 波乱の学年集会

幸運と不運が同時に襲ってきたグループ決めから数日。

新入生向けガイダンスも落ち着いてきて、授業が少しずつ始まってきたところ。林間学校に向けての学年集会が開かれることになった。

私たちはクラスごとに整列してラウンジに向かい、奥から順番に着席する。こういった集まりの時は講堂ではなく、こちらを利用する場面が多い。

いつもはカフェのように並べられたテーブルと椅子が、こういった集会の時はラウンジの管理人さんによって並び替えられる。テーブルは端に寄せられ、椅子はクラスごとに分かれて座れるように中央に整列されるのだ。

こうするとラウンジの白を基調とした内装は大きな窓から差し込む光を反射して、より広く感じる。

「雪乃！」

聞き覚えのある声があった瞬間、私はハッと我に返った。

顔をあげればラウンジの奥、すでに席に着いていた颯馬くんがこちらに手を振っていた。その横には桜二くんが座っており、二人並んだ姿はまるでモデルのようで絵になる。

（わ、わあ……みんなの視線が一気に突き刺さるなあ……！）

だけど飼い主を見つけた犬のように嬉しそうに颯馬くんを無視するわけにもいかず——そもそもはつきり名前を呼ばれているので逃げ場もないが——私は控えめに手を振り返す。

笑顔がぎこちない自信があるし、なんなら冷や汗も止まらない。

以前も遠くから一度しか会ったことのない私を見つけたり、成人男性を片手で押さえたりとしていたけど……颯馬くんの身体能力が怖い。

「……どうして七瀬さんばかり」

背後から聞こえてきた冷たい声に、私は無意識に肩をすくめた。

振り返らなくても分かる。綾小路さんだ。

（あれから特に何もないけど、気を抜いちやだめだよね）

すなわちとも林間学校の間は同じ部屋だから、これ以上目をつけられたくない。

仲良くなれなくても、必要以上に敵意を向けられるのだけは避けたいよ。

「はいこれ、ユキちゃんの分のしおり」

そんな私たちの間に、アキくんがにこやかに割って入ってきた。

「あ、ありがとう……?」

私の顔を隠すように渡されたしおりは同時に颯馬くんたちの視線も遮ってくれて、その隙にそそくさと着席して存在感を薄くする。

すぐ横にアキくんが座ってくれたから、綾小路さんが隣に来ることもなくなった。

「グループの代表が先生からしおりを貰ってくることになっているみたいだよ。綾小路さん、行ってきたら?」

薄い笑みでそっけなく言ったアキくん。

みるみるうちに綾小路さんの眉間にしわが寄る。

「ええ、そうさせていたadakますわ」

わずかな沈黙のあと、綾小路さんはアキくんを一瞥してさっと身をひるがえした。

ほっと息をついて、ちらりと颯馬くんの方に視線を向ける。

ちょうど桜二くんに肩を叩かれてシユンとしているところだった。おそらく一連の流れを見て、状況を察した桜二くんが颯馬くんを止めてくれたのだろう。

（颯馬くんは何も悪くないのに……私のせいで）

ひとまず嵐は過ぎ去ったが、申し訳ない気持ちに襲われた。

心臓はまだバクバクいつているけど、そのうち落ち着くはず。

何事もなかったように話を振ってくれるアキくんに感謝しながら、私は学年集会が始まるのを待った。



「えー、この林間学校は教師や生徒の相互理解を深めるのを目的に、集団生活を通して協調性を養う——」

個人的なトラブルはあったものの、いざ集会が始まれば、あつという間に林間学校の話がみんなの意識を占めた。

何やら立派なことを学年主任の先生が説明しているが、ちゃんと聞いている生徒は片手で数えられると思う。

大半はしおりを読むのに夢中で、友達同士こそこそと予定をすり合わせている。

「ねえねえ、キャンプファイヤーどうする?」

「もう誘う相手が決まってるなら、この後声掛けに行く?」

先生の話を耳半分に聞き流しながらしおりを読んでいると、ふと背後からそんな声が聞こえた。

(キャンプファイヤーか……)

後ろの女子生徒が話しているキャンプファイヤーとは、林間学校二日目の夜に行われるイベントである。どうやら夕食は大きな焚火を囲んで、一年生全員でバーベキューをする予定らしい。

でも彼女たちが言う誘う相手とは、バーベキューと一緒に行われるフォークダンスの相手のことだろう。

(ここところ、みんなこの話ばかりだもんね)

もちろんフォークダンスは強制参加ではないし、踊る相手もクラス性別関係なく自由だ。

そもそもフォークダンスはどんどん相手が替わっていくもの。最初の相手は自由だけど、踊っていくうちに入れ替わっていく——が、それでも構わないと大抵の生徒は気になる異性を誘って踊るみたい。そのせいか素直にダンスに誘うとは言い出しにくく、キャンプファイヤーが隠し言葉として代わりに使われている。



トイレをお花摘みに行くつて言うみたいに……一緒にするのは怒られそうだけど。そんな乙女力が疑われることを考える私をよそに、女子生徒の話は続く。

「私は桜二様を誘いたいけど、競争率高いだろうなあ」

「まあ、英蘭会のメンバーはそうなるよね。一条様は綾小路さんと踊るのかしら」

英蘭学園には、家柄や財力などの厳しい条件をクリアした生徒だけが選ばれる『英蘭会』という組織がある。その基準はすごく厳しいものらしく、私たちの学年では颯馬くんと桜二くん他に数人しかいない。

全生徒の注目の的だから、こうして話題にあがることもよくあるのだ。

「ウチらの学年はイケメンが多いから、あえて人気どころを避けるのもアリじゃない？」

「それ言ってる。みんな一条様たちに夢中だし、今ならさくつと誘えそう」

と、こんな感じで大盛り上がりだ。

特に内部生はあらかじめ先輩から話を聞いている人も多いのか、林間学校の話が出た日から色んな所でフオークダンスに誘うシーンを見かける。

もちろん颯馬くんと桜二くんはその筆頭で、教室が離れていても誘われる現場を目にするくらいに二人は人気だ。

（おまけに、フオークダンスで最初に踊った相手と結ばれる、なんてジンクスがあるもの。誘うだけタダだし、チャレンジする子は多そう）

今のところ成功した人はいないらしいが、颯馬くんたちはどうするつもりなのだろう。

特に桜二くんが女子と踊る姿は想像つかないが、二人そろって踊らないっていうのもつと想像できない。一応は同性同士で踊ることもあるから、いつそのことあの二人で踊るのかもしれない。

（二人ともカッコいいけど……絵には、ならないかも……）

颯馬くんと桜二くんが手を繋いで踊る姿を思い浮かべて、勝手に吹き出してしまっそうになる。どっちが女子役をやるのだろう。うーん、似合わない……いや、桜二くんなら女装でいけな

いこともないかな。

「ユキちゃんもキャンプファイヤーが楽しみな？」

どうやら顔に出てしまっていたらしい。

アキくんも女子生徒の話は聞こえていたはずだから、私も楽しみにしていると勘違いしたの

だろう。「ううん、そうじゃないの。そもそも私は踊るつもりないよ」

あつざりと首を横に振れば、アキくんが驚いたように目を丸くした。

「えつ、そうなの……?」

「そんなに意外だったかな? 私、運動はあんまり得意じゃないから相手に迷惑をかけちゃいそうだし……」

「そんなことないよ!」

いつもふわふわしているアキくんらしくない、はつきりとした否定。

驚く間もなく、思っていた以上に大きく響いたその声はラウンジ中の視線を集めた。

「三葉、私語は慎むように」

りんかがつづき、林間学校の注意事項を説明していた先生も話を中断し、厳しい口調でアキくんを注意する。

「すみません、気をつけます……」

少し顔を赤らめて、アキくんは申し訳なさそうに謝る。

そうして先生が再び話し始めれば、周りもすぐに興味を失ったように再び前を向いた。

(私がダンス下手なのはアキくんも知っているだろうに、どうしたんだろ)

アキくんの態度が気になったけど、今話しかけるとまた先生に怒られてしまうだろう。気になる気持ちもぐつと堪えようとしたところで、再びアキくんに声をかけられる。

「じゃあ、ユキちゃんはフォークダンスに参加しないってこと?」

「うん、そのつもり。端っこでパーベキューを楽しもうかなって」

「そっか……」

酷く残念そうな声に、思わず横を見る。

アキくんは照れと焦りを混ぜたような、不思議な表情を浮かべていた。

「あ……えつと、なんていうか……ずつと遠目でキャンプファイヤーを眺めるのもつたいない気がして」

「うーん、でも誘えるような相手もないしなあ」

「そんな……ダンスは自由参加だけど、せつかくの機会だし……」

アキくんは一旦言葉を区切ると、何か迷ったように息を飲み込んだ。

ゆつくりと続きを待っていれば、アキくんはセーターに半分以上隠れた手を落ち着かなそうに弄びながら口を開いた。

「その、ぼくと端っこで踊ってみる……?」

「気を遣う必要もないし、変に目立たずキャンプファイヤーを楽しめるかなって……えへ」

「でもそれって、結局遠目でキャンプファイヤーを眺めることにならない……?」

「い、一応踊ってるし、眺めてるだけとは違うよ！」

素直に疑問を口にすれば、アキくんは慌てたように視線を泳がせた。

その反応に、私の中で何かがひらめいた。

（そういえばアキくんも、何人かの女子に誘われていたわ）

特待生だし、今もいろんな芸術コンクールで結果を残し続けているアキくん。

ふんわりと癒される雰囲気も独特で、英蘭会のメンバーじゃなくても人気があるのは当然だ。きつと私が知らないところでも誘われているに違いない。

それでもこうして私を誘ってくれているのは、いまだに友達がいまいどころか、薄っすら孤立している幼馴染みを心配しているからだろう。

（私がいじめられていた時に、止められなかったことをまだ気にしているのかな……）

アキくんはすでに転校した後のことだから、どうしようもなかったことなのに。むしろいつも話を聞いてくれたことにどれだけ助けられたことか。

このことはどれだけ説明しても、アキくんは信じてくれないんだよな……

（林間学校で私がぼつちにならないように気を遣ってくれたのかな）

少し重くなった気持ちを振り払うように、私は明るい笑顔を意識してアキくんに答える。

「私なら一人でも大丈夫だから、気にしないで。確かにアキくんとなら自由に楽しめるけど、それで私に付き合ってもらうのは悪いもの」

「悪くないよ！ ぼくはどんな状況でも、ユキちゃんと一緒に絶対楽しいもん」

小声ながらもはっきりとした言葉に、私は首を横に振った。

「無理に気を遣わなくていいんだよ？ 本当にせっかくの林間学校なんだから、アキくんも好きに楽しんでほしいな」

「……好きに楽しみたいから誘ったんだけどな」

アキくんは不満そうに頬を膨らませて、何やらポソツと呟いた。

しかしそれを聞き返す前に、アキくんは言葉を続ける。

「……じゃあ、ユキちゃんは誰とも踊らないってことだよな」

「ええ？ ……まあ、そうだね？」

最初からそう言っているのに、念押しのように確認されて戸惑う。

ひとまず領いて見せた私に、アキくんは再び頬を膨らませて前を向いた。やつぱり不満そうである。

「もう、それならいいや。踊りたくないのに無理して誘うのもかつこよくないし」



「……?」

いまいちアキくんの目的が掴めなくて、私は首を傾げることしかできない。ただアキくんがもう一度こちらを見ることはなく、その寂しそうな横顔が私の心に引っかかった。

(……あれ、そんな顔をさせるつもりじゃなかったのに)

私に気を遣わず、林間学校を楽しんでほしかっただけなのに。

逆にアキくんを傷つけてしまった気がして——胸の奥がじくじくと痛んだ。

でも悲しい顔をさせてしまった手順、理由も分からないのにもう一度声をかけるのはためらわれた。

もやもやしたまま前を向き直るけど、変わらず淡々と続いている先生の説明が、やけに耳についた。

それからアキくんとは特に会話がないうまま、気づけば学年集会は終わっていた。

帰りはクラスごとにまとまる必要はなく、みんな自由にばらばらと席を立てて教室に戻っていく。私とアキくんは人混みが終わるのを見計らって移動するつもりで、しばらく席に座ったまま待つことにする。

そんなとき、私とアキくんのスマホが同時に震えた。

(……『付喪神鑑定団』?)

画面を見ると、身に覚えがないグループからのメッセージ通知だった。

アキくんも同じだったようで、先ほどの気まずさも忘れて二人で顔を見合わせる。

こんなグループに入った記憶はないが、ネーミングに心当たりはあった。

ハツと颯馬くんたちが座つていた方を見れば、予想通り二人もまだラウンジに残っていた。綾小路さんを筆頭に、二人に話しかけたそうな女子たちが様子をうかがっていたけど……桜二くんがわざとらしく「あーあ、みんなが戻ったあと、英蘭会の打ち合わせがあるんだよねえ」と声を上げたことでトボトボ帰っていった。

（本人が言うことは尊重するんだ……）

もちろん根性があつて残ろうとした子もいたけど、桜二くんの睨みと颯馬くんの咳払いで撃退されていった。

どんだん人が少なくなっていく中、私とアキくんは存在感を消して様子をうかがう。

「あ」

何やらスマホを操作している颯馬くんの横で、私と目が合った桜二くんがいたずらっぽいなを浮かべて、こちらに向かつてスマホをひらひらと振ってみせた。

遠目でよく見えないが、メッセージを送つたのはオレたちだというアピールなのだろう。

「やつぱり白鳥の仕業か」

アキくんの呟きに小さくうなずき返す。

この間も新しいメッセージが届いて、私は急いでメッセージを開けた。

『颯馬…放課後、蘭の館に集合してくれ。大事な話があるんだ』

『桜二…ふつーに林間学校の話だから、逃がないでねへ』

顔文字一つでこんなに圧を出せるんだと感心しながら、私は突然のお誘いに首を傾げた。

画面では勝手にネタバラシをされた颯馬くんと桜二くんのレスポンスバトルが続いていたが、

あまり意味のある情報はなさそうだ。

呆れて顔を上げたアキくんが大きなため息をつく。

「いつの間にかこんなグループを作ったんだろ」

「でも、ちよつと嬉しいかも」

颯馬くんたちとも個別に連絡先を交換しているが、今後も鑑定団として活動していくならまとめて連絡できる場も必要だろう。

何より今まで家族とアキくんしか連絡先になかったから、グループを作る必要もなかった。友達らしいことが一つできて、ちよつと感動する。

グループ招待を受けてから、私はまだ止まらないやり取りをスルーしてざつそく返事をした。

『雪乃…分かった、ちゃんと行くよ』
『秋兔…ユキちゃんが行くならぼくも』
『桜二…二名様のご案内、承りました。二人ともフリーパスにしてるから、勝手に前回の部屋まで入って来て』

冗談も交えた桜二くんのメッセージにスタンプを返して、私はアキくんと早足で教室に戻る。
(綾小路さんにバレないように、こっそり移動しないと)

今日は学年集会が最後だから、あとはホームルームだけやって終わりだ。手早く帰りの準備を進めていけば、ふと直接声をかけられなかったなと気づく。

颯馬くんの性格なら周りのことなど気にせず、直接誘ってきそうだけど……もしかして桜二くんが何か言ってくれたのかもしれない。掴みどころがなくてちよつと毒を吐くところもあるけど、基本的によく他人を見ているから。

(それにしても、林間学校の話ってなんだろう)

今回はキャンプファイヤーを除き、全てクラス行動かグループ行動をすることになっている。

だから別のクラスである颯馬くんたちとは関わる機会も少ないはずだけど……鑑定団のグループトークだし、何か依頼があるのかも。

林間学校のスケジュールに歴史名所巡りがあるから、可能性はあるよね！

(依頼なら、また骨董品を近くで見られるってこと?)

そう考えると、途端に放課後が楽しみになってくる。

付喪神が視える縁もあって、私は昔から骨董品とか工芸品が大好きだ。作品それぞれの違いや模様を眺めるのももちろん、作られた背景や歴史を知るのもワクワクする。

今までは博物館や展示で満足するしかなかったが、付喪神鑑定士になったことで直接かかわるチャンスを手に入れたのだ。

私の力は大つぴらに宣伝できるものじゃないし、鑑定団はそれぞれのペースに合わせてひっそり活動するという話だから、こんなに早く次が来るとは思わなかった。

学校で颯馬くんたちに近づくのはまだ勇気がいるけど、それでも期待の方が上回る。

まだ予想の話に過ぎないけど、私はそわそわとホームルームが終わるのを待った。